

# アマゾンの森林と ウーリーモンキー

西郵頭達

(理工学研究所教授)

私が初めてアマゾンに行ったのは一九七三年である。それから現在まで二十年余りの間に何回そこへ行っただろう。私がアマゾンに行くのはそこに住むサルや生獣・社会を研究するためである。80年代初めまでは、調査対象と調査地を求めてかなりあちこちを動いた。86年にすばらしい調査地が見つかり、そこに半永久基地を作った。それ以後年2回合計四カ月そこに滞在する、ということをや殆ど毎年続けている。調査地を中心に、アマゾンの自然、そこでの生活、調査を続けてきたウーリーモンキーのことなどを紹介したい。

## ● マカレナ生態研究センター

調査地はコロンビア国立マカレナ自然公園の中にあり、基地とその周辺は「マカレナ生態研究センター」と呼ばれている。研究センターと言っても、数戸の掘つ建て小屋と1艘のモーター付き丸木舟を持つに過ぎないが、ここには常時何名かのコロンビア人研究者や学生がいてサルだけでなく、鳥、昆虫、そし

て森林に関するさまざまな野外研究が活発に行われている。ここに関わる日本人研究者は私を含めて数名いるが、当然のことながらそう頻繁にここに来るわけにはいかない。

研究センターは北緯3度、西経74度近くにあり、アマゾン森林全体でいえば、その北西端に位置する。高度は海拔400mで、アンデス山麓に近い。日本からここまでの行程をざっと述べる。私は通常関西空港からロサンジェルス経由でマイアミに飛び、そこで一泊し、翌日コロンビアの首都ボゴタ(海拔2600m)に着く。その先は3〜4時間の陸路と1時間の飛行でマカレナの町に着き、そこからモーター付き丸木舟で5〜6時間川を溯ればセンターのキャンプに着く。私たちは首都からキャンプまで、途中で買い物や人々との打ち合わせがあるので、普通二日か三日かかって行く。ただし、これは陸、空、川の便がほぼ正常に動いている時の話で、そうでない時がよくある。例えば、飛行機はプロペラ機で、マカレナの空港は舗装してないから、雨が降れば飛ばない。また、川が増水すると、急流の部分(約4キロ)は航行不能となるので、そこはモーターやガ



調査基地

ソリンを含めてすべての荷物を人の肩や馬の背で運ばねばならない。このように条件が悪いと、一日、二日と遅れることになるが、この調査地はそれでもアクセスは抜群に良い方である。70年代にはコロンビアの別の地域でサルの調査をしたが、首都からそこまで最低1週間かかった。しかし、南米やアフリカで自然の良く残っている調査地へのアクセスとしてはこのほうがむしろ一般的である。

### ● 熱帯雨林

熱帯で温度が高く雨量の多い地方に成立する森林を熱帯雨林という。アマゾン森林は世界最大の熱帯雨林である。キャンプで毎日とっている気象データによれば、気温は普通の月も最高30度、最低20度である。したがって、暑いと言っても日本の夏ほど暑くない。私は夜寝る時薄い羽毛の寝袋を用いている。雨量は年間2600ミリで、6―7月に最も多く、12月から翌年2月までの乾季は稀にしか雨が降らない。年間雨量は日本の多くの場所に比べてかなり多いが(ちなみに京都は1600ミリ)、それほど気にならなかった。しかし湿度の高いことにはずいぶん悩まされた。とりわけ夜間の湿度は高く、乾季でも、90%以下になることはなかった。そのため、下着や寝袋はいつも湿っていた。双眼鏡やカメラを放置しておくともレンズにカビが生え、フィルムは溶けて巻取れなくなったりした。それでこれらは毎夜乾燥剤とともにタッパーウェアにしまっておかねばならなかった。

このものすごい湿気はほとんどが植物から発散されたものである。すなわち、湿度が高いのは森林空間を占める植物体の密度が高いからである。こう言うと森の中は下生えがびっしり生えて歩きにくい所と思われるかもしれないが——多くの人が熱帯の「密林（ジャングル）」にこのようなイメージをもっているが——事実はその反対である。多くの熱帯雨林では、樹冠は上中下の三層および突出高木から成り、私たちの調査地では上層・25〜30m、中層・10数m、下層・数m、突出高木・35m以上である。森林はこのような層状構造になっているから、林床まで達する光は僅かであり、そのため下生えは少なく歩きやすい。私が南米から戻ると日焼けしているが、こ



ウーリーモンキーのオス

れはキャンプから首都までの道中、とくに川旅で焼けたのであり、森の中でサルを追って暮らしていると陽にあたらなから色はむしろ白くなる。熱帯では太陽は日中のほとんどの時間真上にあり、植物は光を求めてなるべく上に伸びようとするからどの木も下枝が無く、まるで手入れの良い北山杉のようにスライとしてゐる。着生植物が多いのも熱帯雨林の特徴であるが、それも光を求めてはるか上の方に見られる。

### ● サルを追って

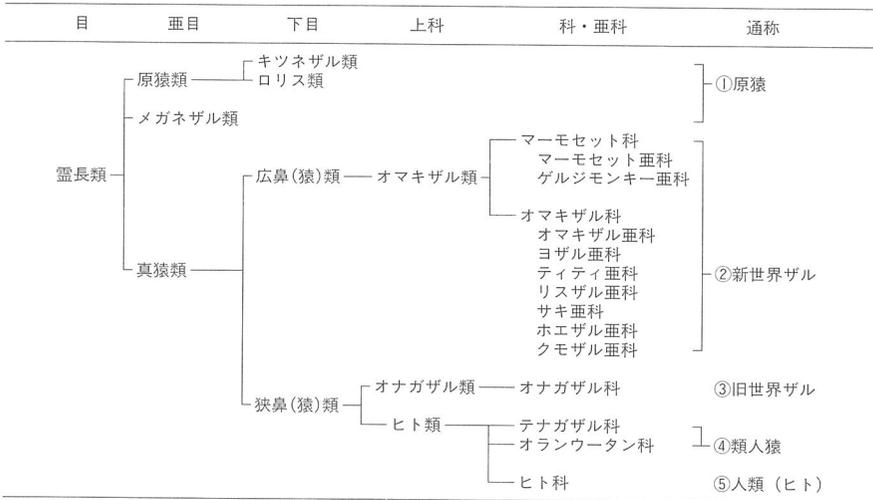
キャンプでは5時過ぎに起きる。まわりはまだ暗い。台所に行き、ローソクを灯し、ガソリンコンロに火をつけ湯を沸かす。その一方で、たいていは前夜の夕食の残りで、弁当を作る。湯がわくとコーヒーを作り、湯の一部で森に持っていくお茶を作つて小さなマホービンに詰める。そのころになると同僚たちが起きてくるが、私はコーヒーを一杯飲んだだけで夜が明け始めた森の中に入っていく。そして、前日の夕方確かめておいたウーリーモンキーの寝場所を指してひたすら歩く。彼らが移動を始める前にそこに着くためである。ウーリーの行動域は広いので移動してしまつた後で彼らを見つけるのは容易ではない。早起きもつらいが、日が高く上つて暑くなつた森の中で彼らを探して歩き回るほうがもつとつらい。6時の日の出とともに、ウーリーは行動を開始するが普通30分位はまだ移動しない。また、日没は午後6時だがその1時間から30分前には寝場所を決める。

活動リズムはサルの種類によって少しずつ違う。私の同僚で宮城教育大の伊沢紘生先生はホエザルを追っているが、彼の群れは7時にならないと起きないし、4時には寝場所を決める。それで彼は、私と違って悠々とコーヒーを飲み、朝食をとつてから出発できる。いっぽう夜行性のヨザルを研究していたコロンビア人女子学生は日没前に森に入り、日の出近くになってキャンプに戻り、昼間は寝ている、という生活をしてた。

私がキャンプに戻るのは5時半から6時の間である。それから、川での水浴と洗濯、食事の支度、夕食、おしゃべり、就寝というのが日課である。一日の生活でだれもが一番楽しみにしているのは夕食である。町へ買ひ物のためのボートを出すのは半月に一回であり、ごく最近まで冷蔵庫がなかったことから、キャンプではどうしても新鮮な野菜と肉が欠ける。しかし、魚がしょっちゅう捕れるのであまり苦にならない。何10種もの魚が捕れるが、量的にはナマズ類を食べることが多い。季節によっては、刺し身にとても美味しいカチャマという魚が捕れる。醬油だけはいつも日本からもつて行き、様々な料理に用いる。

### ● ウーリーモンキーの社会

マカレナではこの十年間ウーリーモンキーだけを見てきた。正確に言うとうーリーモンキーの一つの群れだけをずっと見てきた。群れのメンバーをすべて識別し、名前を付け、個体と個体の関係を継続して観察してきた。その結果分かったことは多い。最大の発見はウーリーモンキー社会が「父系」、すなわち、



第1表 霊長類の系統 (Napier & Napier, 1985 を一部変更)

雌だけが群れを出入りし雄は生まれた群れから出ていかない、というタイプに属することである。このタイプの社会はウーリーモンキーと同じクモザル亜科に属するクモザルおよびムリキにも存在することが最近分かったが、それまでは類人猿のチンパンジーとボノボだけで知られていた。クモザル亜科のサルは、腕わたりをする、成長が遅い、等の点でも類人猿的である。しかしながら、クモザル亜科が類人猿と系統的に近い訳ではない。南米のサルは広鼻類、そしてニホンザル等の旧世界ザル、類人猿、ヒトは狭鼻類に属するが、両者の分岐は4000万年前と推定されている。その直後広鼻類の祖先は(どのようにしてかは不明だが)大西洋を越えて南米に渡り、現在見られるような様々なグループを生み出した(第1表)。オーストラリア大陸の有袋類と他の大陸の哺乳類のように、地理的、時間的に大きく隔離された二つの異なる系統群の間に形態や生活の類似が見られることがある。ウーリーとチンパンジーとの類似もそのような「平行進化」の一つだと思われる。

南米でこれからもやりたいことは沢山ある。しかし問題は身体的にいつまで今までのような仕事を続けられるか、ということである。長年の使い過ぎで、二年前には右足の、そして今春は左足の半月板を手術した。これからは自分のペースを少し落とさざるを得ないなと思っている。また、若い後継者も見つける必要がある。